九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

京都府立総合資料館蔵『古今集註』翻刻と解題（二）

日高，愛子
九州大学大学院博士後期課程

https://doi.org/10.15017/15084

出版情報：文獻探究. 46, pp.74-99, 2008-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

京都府立総合資料館蔵『古今集註』翻刻と解題（二）

日高愛子

前号において、栄雅の古今集講釈を聞書したものとして四本があり、その系統が二系統に分かれることを示したが、その後『古今集注釈書伝本書目』（「斯道文庫書誌叢刊七」勉誠出版、平成一九年二月）に依り、東山御文庫に所蔵される一本を新たに知り得たので、ここに記す。

この東山御文庫蔵本（以下、「東山本」と略称する）は、「長享三年四月十四日〻御講尺終ル也」として、他の四本と同じ奥書が確認される。歌注は、広島大学蔵本（以下、「為和本」と略称する）および京都府立総合資料館蔵本（以下、「京府本」と略称する）の二本と一致する。歌の上の句だけを記す書写の構成は為和本と一致するが、東山本には為和本に見られるような他説等の加筆はない。ただし、東山本には墨消による訂正が散見される。京府本と為和本との細かな異同箇所について、東山本は為和本と多く一致している一方で、墨消により訂正された箇所については京府本と概ね一致している。したがって、東山本は、為和本に近い一本により書写された後、京府本に近い一本により加筆訂正されたものと思われる。

以上、新たに知り得た東山本も合わせ、五本の系統を改めて示すと、おおよそ次のようになる。

一系統

京都府立総合資料館蔵本【京府本】
　写本一冊存（巻十一以下のみ残存）
　（外題）「古今集　合本／恋哥　全」

東山御文庫蔵本【東山本】
　写本一冊
　（外題）「古今集聞書四季ヨリ真名序□／四月十四日終□」

広島大学蔵本【為和本】
　写本二巻二冊の本文部分
　（外題）「古今聞書上（下）為和卿筆═══（墨消・判読不能）」

二系統

今治市河野信一記念文化館蔵本【河野本】
　写本一冊
　（外題）「蓮心院殿説古今集註」

京都大学蔵本【朱書本】
　刊本『両度聞書』六巻八冊の余白・行間にある書入
　（外題）「古今和歌集抄」（内題）「古今和歌集両度聞書」

翻刻

※凡例については、前号を参照されたい。猶、紙面の都合上、今号は恋歌五から雑歌下までの翻刻を掲載する。

第十五　恋五

［747］
一五条の后の宮とは仁明の御子文徳の后也ほいにはあらてとは本意ニ非す也子細あるへき也梅の花さかりとよむ也

在原業平朝臣

747
一月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとの身にして
序ニ委書也

（＊）　**藤原の仲平の朝臣**

748
一花すゝき我こそしたに思しかほにいてゝ人にむすはれにけり
ほにいてゝはそなたよりほにいてたる也むすふとは恋契也此哥枇杷左大臣仲平人ニ物いひける時の哥也本女房を向て後無音也然ニ仲平左大臣をけさうしけると也なかひらをなりひらニ書ちかへ歟業平集にも伊勢集にもなしと也（＊）

【校異】＊―仲平、蔵人頭右近衛中将、承平七年至左大臣、御号枇杷左大臣。昭宣公二男、長良卿孫。　＊―明心云、祇註、正説也。

藤原かねすけ朝臣

749
一よそにのみきかましものをゝとは河わたるとなしにみなれそめけん
義なし

750
一わかことく我をおもはん人もかなさてもやうきと世を心みん
同

凡河内みつね

751
一久方のあまつそらにもすまなくに人はよそにそ思へらなる
同

もとかた

752
一見ても又またもみまくのほしけれはなるゝを人はいとふへら也
同　見まくはみたき也

よみ人しらす

753
一雲もなくなきたるあさの我なれやいとはれてのみよをはへぬらん

きのとものり

754
一花かたみめならふ人のあまたあれはわすられぬらん数ならぬ身は
義なしかた見は筌（カタミ）籠也めならふ人はめん〳〵に思人あると也
かこの目のならふ心也

よみ人しらす

【校異】めん〳〵に思人ある―思人おほくある

755
一うきめのみおひてなかるゝ浦なれはかりにのみこそあまはよるらめ
義なしかりにのみとは参会もかりそめと云也海士のめをかるによせて我うきめをよむ也

同

756
一あひにあひて物思ころの我袖にやとる月さへぬるゝかほなる
義なしあひにあひてはあくまて物をおもふ也ぬるゝかほなるは
面白詞也となり

伊勢

757 一秋ならてをく白露はねさめする我たまくらのしつく成けり
義なし（＊）
【校異】＊―秋ならず。時の露にあらず。

よみ人しらす

758 一すまのあまのしほやき衣おきをあらみまとをにあれや君かきまさぬ
義なしをさとは筬ヲサ也

同

759 一山しろのよとのわかこもかりにたにこぬ人たのむ我そはかなき
同

同

760 一あひみねは恋こそまされみなせ川なにゝふかめて思そめけん
水無瀬と云心也

同

761 一暁のしきのはねかきもゝはかき君かこぬよは我そかすかく
序の聞書ニあるへし

同

762 一玉かつら今はたゆとや吹風のをとにも人のきこえさるらん
義なし玉かつらは追かけをも云今の世の鬘ニあらすひんなとに
うつくしくかけし也源物ニ末摘の哥のたゆましきすちとたのみ
し玉かつらおもひのほかにかけはなれぬる是は末摘のめのとの
太宰タサイニ付て下時鬘を餞ニやるとての也

同

763 一我そてにまたき時雨のふりぬるは君か心に秋やきぬらむ
義なし

同

764 一山の井の浅き心もおもはぬをかけはかりのみ人のみゆらん
同　かけはかりのみはそとみる心也

同

765 一忘草たねとらましをあふ事のいとかくかたき物としりせは
同　忘草は萱草ケンサウの事也女房は北堂ニとふる也忘憂草ハウイウとも云也愁を忘草也
【校異】愁を忘草也―＊

同

766 一こふれとも逢夜のなきは忘草ゆめちにさへやおひしけるらん
義なし

同

767 一夢にたにあふことかたく成ゆくは我やいをねぬ人やわするゝいをねぬは我ねぬほとに夢をみぬかと也

けむけい法師

768 一もろこしも夢にみしかはちかゝりき思はぬ中そはるけかりける
同

[769] 一さたのゝほる　備中守　貞朝臣　登　仁明御子
【校異】さたのゝほる　備中守　貞朝臣　登　仁明御子―登、正五位下。母三国町、仁明天皇更衣、喜僧正妹也。貞朝臣登、備中守、仁明御子、さた。

さたののほる

769 一ひとりのみなかめふるやのつまなれは人をしのふの草そおひける
なかめ長雨也ひとりつくゝとなかむる心もあり人をしのふは

古屋の軒ニ生る草なれは如此よむ也

770 一我やとはみちもなきまてあれにけりつれなき人をまつとせしまに

僧正遍昭

義なし

771 一今こむといひて別しあしたより思ひくらしのねをのみそなく

同

同　おもひくらしとは日くらしと也

772 一こめやとは思ふ物からひくらしの鳴ゆふくれはたちまたれつゝ

よみ人しらす

同　こめやとはこうする事かとはおもへとも也

773 一いましはとわひにし物をさゝかにの衣にかゝり我をたのむる

同

一説いましはと也しは例のやすめ字也いましはと用給ふ也いまは中〳〵とわひしに蛛の衣にくりて又もしやとおもはすると也

蜘蛛下ニ嘉事ありの心也（＊）

【校異】一説いましはと也―＊　いましはと用給ふ也いまは中〳〵とわひしに蛛の衣にくりて又もしやとおもはすると也―今しはとは、春部に、誰しかもの詞の如し。今はとおもひ切て、わびにし物を、さゝがにの、又、人を待べきやうに我をたのむると云由也。今しばしと云にはあらず。不可用也。蜘蛛結て好事ありと也　＊―万葉第四、今しはに名のおしけくも我はなし妹によりてはちへにたつとも、今はと云べきを今しはとよめる証歌也。

774 一いまはこしと思物からわすれつゝまたるゝことのまたもやまぬか

同

775 一月夜にはこぬ人またるかきくもり雨もふらなんわひつゝもねん

同

義なし　篁事ニ種々事を此哥ニ書也題不知也心得て可見也（＊）

【校異】＊―前第九巻、わたの原の歌の註に委也。

776 一うへていにし秋田かるまてみえこねはけさ初かりのねにそ鳴ぬる

同

田をはしむる時分ニかへりし鴈の事ニよせて田をかるまて人のこぬと恨也

777 一こぬ人をまつゆふくれの秋風はいかにふけはかわひしかるらん

同

義なし

778 一ひさしくも成にける哉すみのえのまつはくるしき物にそ有ける

同

同　序哥也

779 一すみのえのまつほとひさに成ぬれはあしたつのねになかぬ日はなし

かねみのおほきみ

義なし

780 一みわの山いかに待みん年ふともたつぬる人もあらしとおもへは

伊勢

事書に見えたり

[781] 一雲林院のみこ　常康親王　仁明御子也

雲林院のみこ

781 一吹まよふのかせをさむみ秋はきのうつりもゆくか人の心の

義なしのとまりの哥也　のとまりの哥是まてかと也

【校異】のとまりの哥是まてのと也―＊

をのゝこまち

782 一今はとてわか身時雨にふりぬれは事のはさへにうつろひにけり

同　身のふりたる也

［783］

一返し　をのゝさたき　小野貞樹也

小野さたき

783 一人をおもふ心のこのはにあらはこそ風のまに〳〵ちりもみたれめ

同　我心の木葉ならはみたれんすれと我は不変なる心なると也

同

784 一あま雲のよそにも人のなりゆくかさすかにめにはみゆる物から

事書見えたりあま雲は天の雲一説雨の雲とも雲の雲用ゆ

【校異】事書見えたりあま雲は天の雲一説雨の雲とも雲の雲用ゆ―天也。雨は不用也。

なりひらの朝臣

785 一ゆきかへりそらにのみしてふる事はわかゐる山の風はやみ也

返し　義なし風はやみは其方の心の風のあらきと也わかゐる山こなたといふ心也

かけのりのおほきみ

786 一から衣なれは身にこそまつはれめかけてのみやはこひんと思し

なれは身にこそとは衣のなるゝとはしほるゝ心也なへてしほれは身にまつはるへきかけてとは衣架かくる心也　衣架とはころもをかくる物也

【校異】かけてとは衣架かくる心也―衣架にかけてと也。　衣架とはころもをかくる物也―＊

とものり

787 一秋風は身をわけてしもふかなくに人の心のそらになるらむ

義なし

源宗于朝臣

788 一つれもなくなりゆく人の事のはそ秋よりさきのもみちなりける

同

兵衛

789 一しての山ふもとをみてそかへりにしつらき人よりまつこらしとて

事書みえたり兵衛女房也藤原高経朝臣女也女房の哥にては少はしたなき歟と也

【校異】事書みえたり兵衛女房也藤原高経朝臣女也―＊　歟―歌也

こまちかあね

790 一時過てかれゆくをのゝあさちには今は思ひそたえすもえける

事書みゆおもひは火也

伊勢

791 一冬かれの野へとわか身をおもひせはもえては春をまたまし物を

事書みゆ春をまたましとは悦をまたんの心也野火焼（ヤクワヤケ）トモ不（ス）レ尽（ツキ）春風吹（シユンフウフイ）テ又（タ）生（シヤウ）ス（ス）と云心有へき歟

【校異】事書みゆ―＊

としのり

792 一水のあわのきえてうき身といひなから流て猶もたのまるゝかな

義なし流て猶もとはなからへて憑と也

【校異】憑―頼

793 一みなせ川ありて行水なくはこそつゐに我身をたえぬとおもはめ
水なき河と云も水の流也我身もたえたりともつゐにはたのまん
する物をと也
よみ人しらす

794 一よしの河よしや人こそつらからめはやくいひてし事はわすれし
義なしはやくとはとくいひし事也
みつね

795 一世中の人の心は花そめのうつろひやすき色にそ有ける
義なし
よみ人しらす

796 一心こそうたてにくけれそめさらはうつろふ事もおしからましや
同　うたてはうたゝ也
同

【校異】うたてはうたゝ也―転也

797 一いろみえでうつろふ物は世中の人の心の花にそありける
義なし（＊）
こまち

【校異】＊―見えで、当流也。

798 一我のみやよをうくひすとなきわひん人の心の花とちりなは
義なし
よみ人しらす

799 一おもふともかれなん人をいかゝせむあかす散ぬる花とこそみめ
同
素性法師

800 一今はとて君かかれなはわかやとの花をはひとりみてやしのはん
義なし
よみ人しらす

［801］一むねゆきのあをんあそんの心也宗干此時分四品なきとや然共朝臣
と書也

801 一忘草かれもやするとつれもなき人の心にしもはをか南
義なし
むねゆきのあをむ

802 一わすれ草なにをかたねと思しはつれなき人の心成けり
同
そせい法し

803 一秋の田のいねてふこともかけなくになにをうしとか人のかるらん
いねてふこともとはいねといふ事もいはぬ也悉皆作毛ニよせて
うしとかも牛也
同

804 一はつ鴈のなきこそわたれ世中の人の心の秋しうけれは
義なし
きのつらゆき

805 一あはれともうしとも物を思時なとか涙のいとなかるらん
同　いとなかるらんとはいとまなかるらむと也いとなかるらん
と一説不用
よみ人しらす

806 一身をうしと思にきえぬ物なれはかくても塵ぬる世にこそ有けれ
同

義なし

[807] 一典侍藤原なほいこの朝臣　直子也

典侍藤原なほいこの朝臣

807 一あまのかるもにすむゝしの我からとねをこそなかめ世をはうらみし

異義なし

[808] 一いなはもとよのおほきみの女也

いなは

808 一あひみぬもうきも我身のから衣思しらすもとくるひもかな

同　我身からなる=猶うき身のひものとくる不審と也

すかのゝたゝをむ忠臣

809 一つれなきを今はこひしと思へとも心よはくもおつる涙か

同　こひしとよむなり

【校異】こひしとよむなり―不恋。忠臣

伊勢

810 一人しれすたえなましかはわひつゝもなき名そとたにいはまし物を

義なし

よみ人しらす

811 一それをたに思事とてわかやとを見きとないひそ人のきかくに

みきとはみたるとないひそ也人のきかくにとは人のきかんすると也おもふ事とてはそれをたに我心のまゝにせんすると也

同

812 一あふ事のもはらたえぬる時にこそ人の恋しき事もしりけれ

義なしもはらはもつはら也

【校異】もはらはもつはら也―専也。

同

813 一わひはつる時さへものゝかなしきはいつこをしのふ涙なるらん

同

藤原おきかせ

814 一恨てもなきてもいはむかたそなきかゝみにみゆる影ならすして

同

よみ人しらす

815 一夕されは人なきとこを打はらひなけかんためとなれる我身か

同

同

816 一わたつみのわか身こす浪立帰あまのすむてふうらみつるかな

同　わか身こす波とは涙也末の松山の心=ゆかすうらみつるかなか肝要也後撰哥=はまちとりたのむをたれとふみそむる跡うちつけな我身こす浪

同

817 一あらをたをあらすきかへし〳〵ても人の心をみてこそやまめ

義なしかへし〳〵てとは返々也心底をしらんと也

同

818 一有そうみのはまのまさことたのめしはわするゝ事のかすにそ有ける

義なしありそ海は海の名也名所にも有有所風なとよむなり

同

819 一あしへより雲井をさしてゆくかわのいや遠さかる我身かなしも

義なし序哥

820 一しくれつゝもみつるよりもことのはの心の秋にあふそわひしき
もみつるよりもとは草木の色付は衰なれは也

同

821 一秋風のふきと吹ぬるむさしのはなへて草葉の色かはりけり
そへ哥也

こまち

822 一秋かせにあふたのみこそかなしけれ我身むなしく成ぬと思へは
我身むなしくは田の実ニよせて也大風ニ合て稲の実のらぬと也

平さたふむ

823 一秋かせのふきうらかへすくさのはのうらみても猶うらめしきかな
義なし

よみ人しらす

824 一秋といへはよそにそきゝしあた人の我をふるせるなにこそありけ
れ
秋と云事をはたゝ世間の事と聞しに所詮あた人のこなたをあく
名となると也

【校異】所詮―＊

同

825 一わすらるゝ身をうちはしの中たえて人もかよはぬ年そへにける
義なし右の書やう例の事也

坂上是のり

826 一あふことをなからのはしのなからへて恋わたるまに年そへにける
義なし

とものり

827 一うきなからけぬるあわとも成なゝんなかれてとたにたのまれぬ身
は
同　なかれてとたにはなからへてとたにたのまぬ身はきえたき
と也

【校異】なかれてとたには―＊

よみ人しらす

828 一流てはいもせの山のなかに出つるよしのゝ河のよしや世中
此哥の心はいもの山せの山と云ありいもせ不変ニ会向てあるに
吉野の川中をとをりてへたつる事あり世間万事如此也よしや世
中と観すへき也恋の五巻のとちめに置事一段の事也万葉ニせの
山にたゝにむかへりいもの山事ゆるすかもうち橋わたすとあり
うちはしわたすとはかよふ心也そとわたす橋也

第十六　哀傷哥　哀傷と無常トハ似タル事也但無常ハ一向ニ死別ノ事
也哀傷ハ執合テ哀ナル事也少差別アリ

[829] 一いもうとのみまかりけるとは篁の妹（イモウト）也

小野のたかむらの朝臣

829 一なく涙雨とふらなむわたり河水まさりなはかへりくるかに
わたり河は冥途の三途川也雨とふらなんとは涙の雨とふりて川
の水をませと也かへりくるかには帰来るやうにと也

【校異】川の―＊　かへりくるかには―＊

[830]
一さきのおほきおほいまうちきみをしらかはのあたりとは忠仁公也
太政大臣は天智天皇十年ニ大伴王字を始て任也其後忠仁公任す
其時分太政大臣只二人也忠仁公昭宣公仍官を辞せすといへとも前と云也
前後の差也

そせい法し

830
一ちのなみたおちてそたきつしら川は君かよまての名にこそ有けれ
異義なし白河と云名所詮忠仁公存生の時までの名也只今はちの
涙にて色の紅なると也哥の感也

【校異】哥の感也—感慨多歌也

[831]
一ほりかはのおほきおほいまうちきみは昭宣公也寛平三年正月ニ薨五十六
太政大臣関白の始と也

【校異】ほりかはのおほきおほいまうちきみは—＊

[831]
一僧都勝延或説僧正遍昭とあり御家の説遍昭ニ非すと也雅経卿説し
かと勝延也

僧都勝延

831
一空蝉はからをみつゝもなくさめつ深草の山けふりたにたて
義なしなくさみ也詞はなくさめと云也

[832]
一かむつけのみねを　上野岑雄

かむつけみねを

832
一深草のゝへの桜し心あらはことしはかりはすみそめにさけ
義なし

きのとものり

833
一ねてもみゆねてもみえけり大かたはうつせみのよそ夢には有ける
うつせみの世あたなる世はたゝ夢と也唯識論ニ未得真実（ミトクシンジツ）　覚常（カクシヤウ）
処夢中（ショムチウ）とあり

きのつらゆき

834
一夢とこそいふへかりけれ世中にうつゝある物と思けるかな
義なし

みふのたゝみね

835
一ぬるかうちにみるをのみやは夢といはんはかなき世をもうつゝと
はみす
同

同

836
一せをせけはふちと成てもよとみけり別をとむるしからみそなき
同

閑院

837
一さきたゝぬくひのやちたひかなしきはなかるゝ水のかへりこぬ也
くひのやちたひ後悔也八千度

[838]
一きのとものりか身まかりけるとは当集撰者四人の内にて中程ニ卒
せし也然共四人たるによりて序ニは書と也

【校異】きのとものりか身まかりけるとは—友則

つらゆき

838
一あすしらぬ我身とおもへとくれぬまの今日は人こそかなしかりけ
れ
義なし　理哀なる哥と也

839 一時しもあれ秋やは人の別へきあるをみるたに恋しき物を
同　**たゝみね**

840 一神な月時雨にぬるゝもみちはゝたゝわひ人のたもと成けり
同　**凡河内みつね**

841 一ふち衣はつるゝいとはわひ人の涙の玉のをとそなりける
義なし　**たゝみね**

842 一あさ露のおくての山田かりそめにうき世中を思ぬるかな
同　**つらゆき**

843 一すみそめの君の袂は雲なれやたえす涙の雨とのみふる
同　すみ染は凶服也　**たゝみね**

【校異】すみ染は―＊

844 一あしひきの山へに今はすみそめの衣の袖のひる時はなし
事書ニみえたり墨染凶服也　**よみ人しらす**

[845] 一諒（リヤウアン）闇（イホ）のとし池のほとりの花をみてとはいつの比とも勘しり給ぬ
と也文徳清和の比歟と也　**たかむらの朝臣**

845 一水のおもにしつく花の色さやかにも君かみかけのおもほゆるかな
しつくとはしつみもはてす又あらはれもせぬ也さやかにも清き事也きつかと也催馬楽ニかつらきのとよらの寺のまへなれやゑのはゐにしつくしら玉桂とあり

【校異】しつくとはしつみもはてす又あらはれもせぬ也さやかにも清き事也きつかと也催馬楽ニかつらきのとよらの寺のまへなれやゑのはゐにしつくしら玉桂とあり―しづくと云詞、しづむといはゞしづむにあらず。沈は底へ（ママ）たるも又水にいる也。しづくとは、水あ（洗）らはるれども水に入はてず、又、水の下なる石も浪より出るやうなれど顕れもはてずかくれもはてぬ様なるをいへり。万葉、藤なみのかげなる海の底きよみしづく石をも玉とぞわが見る、足引の山の紅葉にしづくあひてちらん山路を君がこえまく、催馬楽、かづらきの寺のまへなるや、とよらの寺の西なるや、えのはゐにしら玉しづく、しら玉しづくとは、沈もはてず又顕もせぬ也。さやかにもは、清くきつかとしたる心也。此歌心、池の水の花の枝のすぐかれてしづく色のさやかなるやうに、君のみかげのおもほゆるとよめる也。

[846] 一深草のみかとの御国忌の日とは仁明の御年忌事也

846 一草ふかき霞の谷に影かくしてる日のくれしけふにやはあらぬ
序の聞書ニあり　**僧正遍正**

847 一みな人は花の衣になりぬ也こけのふもとよかはきたにせよ
事書によくみゆかうふり給なとゝは人の五位ニ成事也諒闇ニ凶服を着人数を被定也

【校異】事書によくみゆかうふり給なとゝは人の五位ニ成事也諒闇ニ凶服を着人数を被定也―かうぶり給りてとは、五位叙爵也。

848 一うちつけにさひしくもあるかもみちはもぬしなきやとは色なかりけり

近院の右のおほいまうちきみ

事書ニみゆ河原のおほいまうちきみは融（トウロ）公也

【校異】は融公也―嵯峨源氏融、寛平七年八月廿五日薨、七十三。

[848] 一近院右大臣也良有公也寛平七年于時大納言右大将民部卿皇太子伝

【校異】也良有公也―能有、文徳源氏　于時―＊　皇太子―太子

つらゆき

849 一郭公けさなくこゑにおとろけは君にわかれし時にそありける

事書ニみゆ

【校異】事書ニみゆ―藤原たかつねの朝臣　長良卿男

きのもちゆき茂行

850 一花よりも人こそあたになりにけれいつれをさきにこひんとかみし

事書ニみゆ

つらゆき

851 一色もかもむかしのこさにほへともうへけん人のかけそ恋しき

事書ニみゆむかしのこさとは色のこくにほふ也むかしのこさすと云本あり不用（＊）

【校異】＊―書写の人のしどけなくて、昔のこさにを、さのこさずと書たるにつけてよみにくゝせば、みだり事このむものゝ徒事を尺したる也。

同

852 一君まさて煙たえにししほかまの浦さひしくもみえわたるかな

事書ニみえたり後所六条の上二町万里小路（マンリコウヂ）の東二丁也

[853] 一よし（と歟）もと　利基也　高藤の兄也

[853] 一みはるのありすけ　御春有助

みはるのありすけ

853 一君かうへしひとむらすゝきむしのねのしけきのへとも成にけるかな

事書ニみゆことかきニさうしとは座敷なとの事也はやくそこに侍りけれはとはもと行てありしと也

【校異】事書ニみゆ―＊　なとの事―也、曹司　そこに侍りけれは―＊

とものり

854 一ことならはことのはさへもきえなゝむみれは涙のたきまさりけり

事書ニみゆちゝとは友則か父也有友也

よみ人しらす

855 一なき人のやとにかよはゝ郭公かけてねにのみなくとつけなん

義なしなき人の宿は後家歟也しての山へ時鳥に事付せんと也

同

856 一たれみよと花さけるらんしら雲のたつのとはやくなりにし物を

同　たつ野とは雲立野となると也

同

857 一かすくにわれをわすれぬ物ならは山のかすみをあはれとは見よ

事書ニ見えたり此事書ニ帳のかたひらのひもとはき丁のかたひらにわなとてをあり其事也

【校異】事書ニ見えたり此事書ニ帳のかたひらのひもとはき丁のかたひらにわなとてをあり其事也―式部卿のみこは、敦慶（アツミ（マヽ））

858 一こゑをたにきかてわかるゝたまよりもなきとこにねん君そかなしき　よみ人しらす

心をつけて吟味スヘキ哥ト也

事書ニみゆ哀なる哥と也　大江千里

859 一もみちはを風にきかせてみるよりもはかなき物はいのち成けり　事書にみゆ　藤原これもと

860 一露をなとあたなる物と思ひけんわか身も草にをかぬはかりを　同　なりひらの朝臣

861 一つゐにゆくみちとはかねてきゝしかときのふ今日とはおもはさりしを　同　在原しけはる

862 一かりそめのゆきかひちとそ思こし今はかきりのかとて成けり　同　哀なる事と也行かひちとは行かよひち也

第十七　雑哥上　雑ニにて色〳〵をましへ入事也

【校異】雑ニにて色〳〵をましへ入事也―＊

863 一わかうへに露そをくなる天河とわたる舟のかひのしつくか　よみ人しらす

伊勢物語ニ種々在之後撰雑一ニ入住わひぬ今はかきりと山さとに身をかくすへき宿もとめてん此哥よみて薄死して面ニ水そゝきていき出てなと伊物にありとわたる舟はと渡舟也

【校異】面ニ―＊

864 一思とちまとゐせる夜は唐錦たゝまくおしき物にそありける　同

おもふとちは友とし也まとひは円居圍居也たゝまくおしきとは錦をたつは大事なれはたつ事おしきと也我恋ニよせて也史義ニ云片錦美なりと云とも猶まなひせいしかたしとはをしへてたつへからす功者にたゝすへきと也又左伝ニ云善錦あり人をしてまなひたゝしめすとあり同心也

865 一うれしきをなにゝつゝまむ唐衣たもとゆたかにたてといはましを　同

義なし中古の哥ニうれしきをむかしは袖につゝみけりこよひは身にもあまりぬる哉

【校異】中古の哥ニ―＊

866 一かきりなき君かためにとおる花は時しもわかぬ物にそ有ける　同

義なし時しもわかぬは四の時をわかぬと也此哥春の部ニも賀部にも入つへしき事也

867 一むらさきのひともとゆへにむさしのゝ草はみなからあはれとそみる　同

義なし一本ゆへは草はおほけれとも一本つゝ生と也古き説也一本さけるしら菊の花ともありみなからはみなゝから也

[868]
一めのおとうとをもて侍けるとは女房のいもうと也うへのきぬとは紫の上のきぬ四位より上へ着也五位まてはあけ也

868 **なりひらの朝臣**

一紫の色こき時はめもはるにのなる草木そわかれさりける
義なしめもはるにとは草の目のはる也はるかにの同心也

[869]
一大納言ふちはらのくにつねの朝臣とは大納言にも朝臣を付也寛平六年五月五日ニ任大納言即位三位也

【校異】大納言ふちはらのくにつねの朝臣とは大納言にも朝臣を付也寛平六年五月五日ニ任大納言即位三位也―国常（ツネ）　寛平六年五月五日任中納言、即宰相。大納言にも朝臣をつくる也

869 **近院の右のおほいまうちきみ**

一色なしと人やみるらむ昔よりふるき心にそめてし物を
義なしそめぬうへのきぬと云ニ付て色なしとありそめ絹也心にそめてしは志深也

【校異】そめ絹―そめぬ絹

[870]
一いその神のなんまつとは南松名乗也いその神の神官也其社を姓にせし也みやつかへは神職にて仕（ツカウマツル）事あり神識を出ても仕也かうふり給とは五位ニなる也

【校異】いその神のなんまつとは南松名乗也いその神の神官也其社を姓にせし也みやつかへは―南松は実名也。其社を姓とする也。石上は姓也。神官也。かうふり給とは五位ニなる也―＊

[870]
一ふるの今道　布留は姓　今道は名也

870 **ふるのいまうち**

一日のひかりやふしわかねはいその神ふりにしさとに花もさきけり
天子の御事也君の御めくみはやふをもわかぬと也花もさきけりは春ニ身の成と也日月に影は浄不浄善悪をわかぬ心なり

[871]
一二条の后また東宮のみやすん所ニ申ける時おほはらのニまうて給とは藤氏の氏神にて忝給也五条の后と伊物ニみゆニ条の后は同車歟御記代（キタイ）王帝記にも有歟氏の三神はならの春日大原野社吉田社是也二条の后は高子王藤原良相の御女貞観八年二月ニ女御十年十二月生第一皇子十一年三月為皇太子元慶元年正月即位日為中宮六年正月為皇太后宮

871 **なりひらの朝臣**

一おほはらやをしほの山もけふこそは神世のこともおもひいつらめ
異義なし名所分別あるへきとて大原やとあるは西也大原（ヲ）と云は北ニあり此所は人隠遁して有所也然ニ名所を可分別事御物語也をしほ山詠は西なるを北の大原ニ少将井の尼閑居の所へ三条院御禊（ケイ）の後伊勢大輔か哥ニ世にとよむとよのみそきをよそにしてをしほの山のみ雪をやみし御幸ニよせて也返しをしほ山梢もみえすふりつみしこやすへらきの御ゆきならまし何も女房の哥にてしとけなき事もあるへきニ通俊卿の撰する集ニ入事如何能々可心得事と也冷泉烏丸の所ニ付て少将井の尼と云けると也

[872]
一よしみねのむねさた　遍昭の僧名也

872 **よしみねのむねさた**

一あまつ風雲のかよひち吹とちよをとめのすかたしはしとゝめん

事書ニみゆをとめの事きよみ原の天皇の吉野ニ御座の時天女下て五たひ袖を返して舞しよりありし事也是文武の御事也

河原の左のおほいまうちきみ

873 一ぬしやたれとへとしらたまいはなくにさらはなへてやあはれと思はん

事書ニみゆ此哥すき事ニ非す陰陽のならひ也玉のかさしの事尺尊の都を出給ふ時の事ニあり男にもある也これは女房の也

[874] 一寛平御時ニの事書の末ニかめをもたせてとは平子の事也おほみきのおろしとは酒のくたるをと也蔵人とものわらひてとは女蔵人也后の御方ニつかふまつる也三条院女蔵人左近と同事也

【校異】寛平御時ニの事書の末ニ――事書に　三条院女蔵人左近と同事也――＊

としゆきの朝臣

874 一たまたれのこかめやいつらこよろきのいその浪わけおきにいてにけり

古人も不審ありしと也玉たれは御簾ニこそなと云也土の物ニ薬の玉の如ニかゝりたるを云と也此哥ニ始てあると心得へしいつらとはいつくへそと也かめを中ニをきあるしはさかなもとめてこゆるきのいそきありきけりとうたひにありおろしはをろしの御服くるはみすのこうと云ニ歟こまかの事也（＊）

【校異】くるはみすのこうと云ニ歟（すゝ）――と云て一座もめす也。俊成卿、「玉だれのこ」とつゞくるは、みそのこすと云々歟。　＊――一説、玉だれのかめをなかにをきてと云風俗のうたとかや。かめの玉だれは、かめに玉のたれたるかたあるを云などあまたかきたり。歌には玉だれとてかめによみつゞけたる事、此歌の外になし。玉だれのみすとのみよめり。風俗のうたにつきてよめるにこそ。

けむけい法師

875 一かたちこそみやまかくれのくち木なれ心は花になさはなりなむ

事書ニみゆ

きのとものり

876 一蝉のはのよるの衣はうすけれとうつりかこくもにほひぬるかな

事書ニみゆうつりかはあなたの匂也

よみ人しらす

877 一をそくいつる月にもある哉あしひきの山のあなたもおしむへら也

義なし

同

878 一わか心なくさめかねつさらしなやをはすて山にてる月をみて

子細大和物語ニありをはをすてゝ則此哥よむへき事如何但女房の云ニ付てすてたれとも我と我心をひるかへして浅増事と思とりて此哥をよみたる歟後悔の心也俊頼朝臣説ニをはすてさるまへはかふり山と云也をはすてとは捨て則付たる歟と

なりひらの朝臣

879 一おほかたは月をもめてしこれそこのつもれは人のおいとなるもの

花も同事なれとも月は常住也

きのつらゆき

880 一かつみれとうとくもある哉月かけのいたらぬさともあらしと思へは

月をみれはうれしき中ニうとましきと也風（フウ）して也みつねよそへも行へき事を云也

881 一ふたつなき物と思しをみなそこに山のはならていつる月かけ
義なし山のはならては月もくたらす水ものほらすと也

よみ人しらす

882 一あまの河雲のみおにてはやけれはひかりとゝめす月そなかるゝ
同　みおは水の早所也

同

883 一あかすして月のかくるゝ山もとはあなたおもてそ恋しかりける
義なし

なりひらの朝臣

884 一あかなくにまたきも月のかくるゝか山のはにけていれすもあらなん
事書ニみゆ

[885] 一田むらのみかとの御時に斎院に侍けるあきらけいことは慧子田村は文徳也慧子（アキラケイコ）母藤原列子（ソラ）従五位上是雄女（本ノ注ニ書）慧子代始斎院天安元年二月癈々其事秘（ヒシテ）レ世莫（ナカレ）レ知（シラスル）云々若先是又有此事歟遂被癈（ハイ）云々元慶元年（五）正月六日薨以述子為斎院母同惟喬二年而退（シリソク）
【校異】田むらのみかとの御時に斎院に侍けるあきらけいことは慧子―＊

[885] 一あま　敬信（キヤウシン）　慧子の母也　よるかの朝臣母也
【校異】あま―＊　慧子の母也―＊

あま敬信

885 一おほそらをてり行月しきよけれは雲かくせともひかりけなくに
事書ニ見えたり

よみ人しらす

886 一いその神ふるからをのゝもとかしは本の心はわすられなくに
もとの心いはん為也ふるからは布留也枯たれとも本柏は葉の春まて残と也をのとは小野也布留野ゝ事也万葉ニほたてふるからと是も枯たる方ニよむ也

同

887 一いにしへの野中のしみつぬるけれともとの心をしる人そくむ
義なし野中清水播州いなみのにあり

同

888 一いにしへのしつのをたまきいやしきもよきもさかりはありし物也
同　をた巻は糸をまく物也いやしきをいはん為也

同

889 一今こそあれ我も昔はおとこ山さかゆく時もありこしものを
義なし

同

890 一世中にふりぬる物はつのくにのなからのはしと我となりけり
同

同

891 一さゝのはにふりつむ雪のうれをもみもとくたちゆくわかさかはも
うれをゝもみは上のをもき也うれこす風と云も上こすかせ也もとくたち行とは本か末になる心也なゝめ也わかさかはもは昔ニ我かへると也わもとよむ也万葉ニ（＊）夜くたちと云も夜の末也
【校異】本か―本のかたぶきてくだりて　＊―夜くたちにね覚てをれば河せとめ

心もしのになくちどりかも、又、夜くだちてなく河千鳥むべしこそ昔の人もしのびゐにけれ、か様につかひたる詞也。

同

892 一おほあらきのもりのした草おいぬれは駒もすさめすかる人もなし

義なし駒もすさめぬとは賞翫せぬ也所によりて賞翫するをも左の桜あさ例の事也（＊）

【校異】＊―又は、桜あさのおふの下草おひぬれば。

893 一かそふれはとまらぬ物を年といひてことしはいたく老そしにける

義なし

894 一をしてるやなにはの水にやくしほのからくも我はおいにけるかな

をしてるはあし引の山久方の雲の類也塩海をはをしてると云湖をはにほてると云也舟ををしてると云はをしいたす心也をしてるやなにはのとつゝけたる也みつとよむ也左のおほとも例事也

【校異】あし引の山久方の雲―久方の空、足引の山

同

895 一おいらくのこむとしりせはかとさしてなしとこたへてあはさらましを

義なし

［895］一左に此みつの哥昔ありけるみたりのおきなとは三人の翁也俊頼の説ニおくの哥四首をかへて七人の翁とあり既ニ三首の左ニみたりの翁とあり七人不用

896 一さかさまにとしもゆかなむとりもあへすすくるよはひやともにかへると

897 一とりとむる物にしあらねはとし月をあはれあなうとすくしつるかな

898 一とゝめあへすむへもとしとはいはれけりしかもつれなくすくるよはひか

としとは俊（トシ）の心也

【校異】俊（トシ）―速

899 一鏡山いさたちよりてみてゆかむ年へぬる身はおいやしぬると

以上四首義なし左の事書例の事也

［900］一なりひらの朝臣のはゝのみことは伊登内親王桓（クワン）武の皇女　貞観三年九月ニ薨

【校異】貞観三年―貞観二年（或三）

900 一おいぬれはさらぬわかれもありといへはいよ〳〵みまくほしきき

みかな

義なしさらぬ別は治定の別也（＊）

【校異】＊―不避別也。回避しがたき也。のがれぬ事也。

なりひらの朝臣

901 一世中にさらぬわかれのなくもかなちよもとなけく人のこのため

同　返し也

902 一白雪のやへふりしきるかへる山かへる〳〵もおいにけるかな
かへる〳〵もは返々くれ〳〵也後撰ニかへるの野山とあり不可然
とあり

としゆきの朝臣

903 一おいぬとてなとか我身をせめきけむおいすは今日にあはまし物か
義なしせめきけんは城をせむる敵をせむるに非す 閲(ヤメテ)の
字也毛詩ニ兄弟庸閲レ外トニ禦ニ其 務 一悔歟子をせむる臣をせ
むると云心也人にあなつられしと也

【校異】 義なしせめきけんは城をせむる敵をせむるに非す 閲の字也毛詩ニ兄弟庸閲レ外トニ禦ニ其 務 一悔歟子をせむる臣をせむると云心也人にあなつられしと也—などか我身をせめきけんとは、責来けんとは歎怨つるよし也。なげきこし、恨こしなど云、同心也。毛詩常棣詩ニ、兄弟閲干墻外禦ニ其務一と云。閲の字をよめりと云も、心はし(ママ)のかにたがふまじけれど、此詞つねに歌などに読ならへる事ならねば責来けんにてありなん。閲の字は、子をせむる、臣をせむると云心也。

よみ人しらす

904 一ちはやふるうちのはしもりなれをしそあはれとは思年のへぬれは

905 一我みてもひさしくなりぬすみの江の岸のひめ松いくよへぬらん

同

906 一住吉の岸の姫松人ならはいくよかへしとゝはましものを
いく代かへしとよむなり

同

907 一梓弓いそへ(辺)のこ松たかよにかよろつよかねてたねをまきけん
以上四首義なし左の事書例事也源物に誰世にか種はまきしと人
とはゝいかにいはねの松はこたへん

908 一かくしつゝ世をやつくさむ高砂のおのへにたてる松ならなくに
義なし 909 誰をかもしる人にせん高砂の松も昔の友ならなくに

よみ人しらす

910 一わたつ海のおきつしほあひにうかふあわのきえぬ物からよる方も
なし

同

911 一わたつ海のかさしにさせる白妙の浪もてゆへるあはちしま山
同 此わたつ海はたゝ海の事ニ非海神事也

同

912 一わたのはらよせくる浪のしは〳〵もみまくのほしき玉つしまかも
しは〳〵は数〳〵也見まくのほしきは面白ニよりて也然ニ衣通姫
地をしめ給也万葉ニ玉つしまみれともあかすいかにしてつゝみ
もてゆかんみぬ人のため

同

913 一なにはかたしほみちくらしあま衣たみのゝしまにたつなきわたる
義なしみのをあまの衣とよむ也

[914] [914] 一つらゆきかいつみの国に侍ける時にやまとよりとある
一藤原たゝふさ和泉国ニ貫之ありし時たゝふさ大和なりけると也任
しつと云事年紀ニ付て不審あり此たゝふさ延喜廿二年正月晦日ニ任

大和守又廿年ニ宇多御門春日社ニ御幸の時たゝふさ後国司也両条共ニしかと記置事也然は若当集奏覧延喜五年以後入たる哥歟と也

藤原たゝふさ

914 一君をおもひおきつのはまになくたつのたつねくれはそありとたにきく

義なしおきつの濱和泉国名所也

つらゆき

915 一おきつ浪たかしのはまのはま松のなにこそ君をまちわたりつれ

同　両国の通路の所也

同

916 一なにはかたおふる玉もをかりそめのあまとそ我はなりぬへらなる

同　事書ニみゆ

みふのたゝみね

917 一すみよしとあまはつくともなかゐすな人忘草おふといふ也

長居すなは長居の濱の名所也

つらゆき

918 一雨によりたみのゝしまをけふゆけとなにはかくれぬ物にそ有ける

同　事書ニみゆ

[919] 一法皇にし河におはしましける時つるすにたてりといふことを題にてとは法皇は寛平の御事也にし河は大井河也かつら川をも云是は大井河也

（＊）鶴立洲　秋山浮水　猿啼山峡なと九首ありと也（＊）

【校異】法皇にし河におはしましける時つるすにたてりといふことを題にてとは法皇は寛平の御事也にし河は大井河也かつら川をも云是は大井河也―＊

＊―此時　＊―行幸も同ある歟。

919 一あしたつのたてる河辺を吹風によせてかへらぬ浪かとそみる

同

義なし

[920] 一中務のみこの家とは　敦慶のみこ也

伊勢

920 一水のうへにうかへる船のきみならはこゝそとまりといはまし物を

事書ニあらは也舟ならはこゝにとゝめまいらせんと也舟はてゝとは舟こきとめたる事也あまを船はつと云もとめたる事也君は船臣は水ともあり

[921] 一からこと物名ニ備前とあり先達の説ニ都ニちかきとあり是をさみすれニ非す当家説たゝ音ニ聞たる也筑紫鎮西（ツクシチンセイ）よりも可聞と也

【校異】さみすれ―さみする（本ノマヽ）

真せい法師

921 一宮こまてひゝきかよへるからことは浪のをすけて風そひきける

在原行平朝臣

922 一こきちらす瀧の白玉ひろひをきてよのうき時の涙にそかる

なりひらの朝臣

923 一ぬきみたる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせはきに

[924] 一承均（ソウク）法師　文字なれはせうきんとよむ也

承均法師

924 一たかためにひきてさらせるぬのなれや世をへてみれとゝる人もな

き

以上四首義なし

神たい法師

925 一きよたきのせゝのしらいとくりためて山わけ衣をりてきましを

（＊）高雄にも醍醐にも清瀧あり是は吉野也山分衣は桑門の衣の事也

【校異】＊―顕注に此歌はよしのにてよみけると云々。

［926］ 一龍門大和也　仙人住也　洞ある也

伊勢

926 一たちぬはぬきぬきし人もなき物をなに山姫のぬのさらすらん

たちぬはぬは仙人のきる衣の事也

【校異】たちぬはぬは仙人のきる衣の事也―仙衣也。

927 一ぬしなくてさらせるぬのをたなはたにわか心とやけふはかさまし

事書ニみえたり文月（フミツキ）よむ也

たちはなのなかもり

［928］ 一ひえの山なるをとはの瀧とは西坂の水のみと云所の南也

たゝみね

928 一たちたきつたきのみなかみ年つもちおいにけらしなくろきすちなし

義なしたきつとはたきつたる心也みなかみは水の上を髪ニよせて也源物ニ白髪を瀧のよとみとあり同心也

みつね

929 一風ふけと所もさらぬ白雲はよをへておつる水にそ有ける

義なし

［930］ 一三条の町惟高の御母也田村文徳也其時の更衣也

堰外の人也

三条の町

930 一おもひせく心のうちのたきなれやおつとはみれとをとのきこえぬ

事書ニ見えたり心のうちの瀧述懐也をとのきこえぬとは画なれは也

つらゆき

931 一さきそめし時より後はうちはへて世は春なれや色のつねなる

事書ニみゆ

［932］ 一屏風のゑによみあはせてとは絵をみてよむと哥をみて絵をかくとかはる也

【校異】屏風のゑによみあはせてとは―＊

坂上これのり

932 一かりてほす山田のいねのこきたれてなきこそわたれ秋のうけれは

義なし事書ニあり

第十八　雑哥下

よみ人しらす

933 一世中はなにかつねなるあすかゝはきのふのふちそけふはせになる

義なし

同

934 一いく世しもあらしわか身をなそもかくあまのかるもに思みたるゝ

人間いくはくもなきにと也

同

935 一鴈のくる峯のあさきりはれすのみ思ひつきせぬ世中のうさ

同　序哥也助覧か哥くるみを隠して詠（＊）

【校異】＊―人間暫時の事也。其内に思ひをする也。

小野のたかむら朝臣

936 一しかりとてそむかれなくに事しあれはまつなけかれぬあなう世中

同　人間はうき時はすてんと云然ニすてられぬ物と也たゝとに

かくにうき世と也

をのゝさたき

937 一宮こ人いかにとゝはゝ山たかみはれぬくもゐにわふとこたへよ

事書ニみえたり行平のとふ人あらはの哥に同

[938] 一文屋のやすひてみかはのそうとはせう也昔は守介尉小目其領（サクワン）〳〵

ありしと也あかたみにはえいてたゝしやとは田舎見ニ下らんやと

也秋の除目（チモク）京官也春の除目県召（アカタメシ）受領也冠召も京官也後拾遺の事

書ニつかさめしの比右大臣へ申状ニ付て受領の事を云さては一篇ニ

不定也

【校異】文屋のやすひて―＊

小野小町

938 一わひぬれは身をうき草のねをたえてさそふ水あらはいなむとそ思

事書ニ見えたりいつくへなりともいかんと也

【校異】事書ニ見えたりいつくへなりともいかんと也―歌は、いづくへなりともさそふ人あらばいかんと云也。

同

939 一あはれてふ事こそうたて世中を思はなれぬほたし成けれ

憂世をそむかんと思立に中〳〵あはれなる事なとありて思たゝ

れぬと也色〳〵に物を思ての事也

よみ人しらす

940 一あはれてふことのはことにをく露は昔をこふる涙なりけり

義なし

同

941 一世中のうきもつらきもつれなくにまつしる物は涙成けり

同

同

942 一よのなかは夢かうつゝかうつゝともゆめともしらすありてなけれ

は

如夢幻泡影　如露亦如電ありてなけれは　亦有亦空　非有非空

の心也

同

943 一世中にいつら我身のありてなしあはれとやいはんあなうとやい

はむ

義なし

同

944 一山里は物のわひしき事こそあれ世のうきよりはすみよかりけり

同

これたかのみこ

945 一白雲のたえすたなひく峯にたにすめはすみぬる世にこそ有けれ

同　これたか小野の雲深所にてあるへし

【校異】これたか小野の雲深所にてあるへし―惟喬御子の住給し小野の山里、雲深所の事なるべし。

ふるのいまみち

946 一しりにけむきゝてもいとへ世中は浪のさはきに風そしくめる
如此如此しりたる歟しらすはきゝてもいとへと也風そしくめるは風の吹しく也吹張たる心也（＊）

【校異】＊―風ぞしくめるは、後撰歌にも、白つゆに風の吹しく秋のゝはつらぬきとめぬ玉ぞちりける、しきりにふく風を、吹しくとも風ぞしくめるとも云也。

そせい

947 一いつくにかよをはいとはむ心こそのにも山にもまとふへらなれ
迷へらなれは市中ノ隠なれはいつくにても心こそ肝要なれと也いかに籠居してありとも心のもちやうにて野にも山にも迷んと也

よみ人しらす

948 一世中は昔よりやはうかりけんわか身ひとつのためになれるか
義なし

同

949 一よのなかをいとふ山辺のくさ木とやあなうの花の色にいてにけん
草も木も世中かうきかと也うのはなのうきと色に出る歟と也白き色也

同

950 一みよしのゝ山のあなたにやとも哉世のうき時のかくれかにせむ
義なし

同

951 一世にふれはうさこそまされみよしのゝいはのかけみちふみならしてん
同　ふみならしてんとはふみなれて住へきと也

同

952 一いかならむいはほのなかにすまはかはよのうきことのきこえこさらん
義なし岩ほの中外道四人あり天上し山に入巌ニ入海ニ入是は死を遁也或尺ニ山河空市ともあり

同

953 一あしひきの山のまに〳〵かくれなむうき世中はあるかひもなし
義なしまに〳〵は山のまゝ也

同

954 一世中のうけくにあきぬおく山のこのはにふれるゆきやけなましうけくとはうきにあくと也行やを雪によせて消ましと也うけくさむけくつらけく御物語ニ（センミヤウ）遷命（ウツルイノチ）ニ安（ヤス）らけく平らけくとよむ事あり其時の事ニ手をうつをかしはてうつと云也

［955］ 一ものゝへのよしな

ものゝへのよしな

955 一世のうきめみえぬやまちへいらむには思ふ人こそほたし成けれ
同　文字なき哥也みえぬのえと山ちへのへと仮名遣ちかへはくるしからぬ也

凡河内みつね

956 一世をすてゝ山にいる人山にても猶うき時はいつちゆくらん
事書ニ見えたり

957 一今更になにおひいつらむ竹のこのうきふししけきよとはしらすや

同

よみ人しらす

958 一世にふれはことのはしけきくれ竹のうきふしことに鶯そなく

義なしことのはしけきとは口舌也鶯そなくはうき世と也

同

959 一木にもあらす草にもあらぬ竹のよのはしに我身は成ぬへらなり

（＊）はしにわか身とははしたに成也とちへもつかぬと也是は高津の内親王嵯峨の女御桓武皇女也人わらへなる事ありしにより て如此よみ給ふと也はしためとは女のくたりたるを云也左の事書ニみゆ

【校異】＊—高津内親王、桓武皇女也。

960 一わか身からうき世中となつけつゝ人のためさへかなしかるらん

義なし

たかむらの朝臣

961 一思きやひなのわかれにおとろへてあまのなはたきいさりせんとは

事書ニみゆひなの別とは夷華夷也題にも寄華離とよむへし此次の題ニ寄市離とあり哥にも都の事をよむへき也遠きゐ中をひなとよむへき也万葉ニ山上のをくら筑前ニ五年居てあまさかるひなに五年すまひして都の手ふりわすられにけり天下とも天離ともかく也あまのなはたきは縄をたくる也なはたけともたきとも五音によりて書也たくる也栲の字也（＊）

【校異】＊—難波江やあまのたぐなはたぎわびてけぶりもしめる五月雨の比

[962] 一田むらの御時に事あたりてとは勅堪なと也

在原行平朝臣

962 一わくらはにとふ人あらはすまのうらにもしほたれつゝわふとこたへよ

事書ニみえたりわくらはとはまれなることなり邂逅の事也若葉をわくら葉と云也今河了俊の説ニいたむ葉と云如何

[963] 一左近将監とけてとは左近尉也とけては外官したる也

をのゝはるかせ

963 一あまひこのをとつれしとそ今は思我か人かと身をたとる世に

事書ニ見えたりあまひこはをとつれいはん為也寛平二年任左少将

【校異】寛平二年任右少将—＊

平さたふむ

964 一うき世にはかとさせりともみえなくになとかわか身のいてかてにする

事書ニみえたりいてたにするとは遁世を門をもさしこめぬにえせぬと也

同

965 一ありはてぬいのちまつまのほとはかりうき事しけくおもはすもかな

[966] 一みこの宮のたちはきにとはたちはきとよむ也

[966] 一みやちのきよき　清樹は橘也　宮道は潔興也

966 一つくはねのこのもとことにたちそよる春のみ山のかけを恋つゝ
事書ニ見えたり春のみやとは東宮也春のみ山のかけをこひつゝ
は宮つかへをこひてよむ也

みやちのきよき

967 一ひかりなき谷には春もよそなれはさきてとくちる物思もなし
事書ニ見えたりさきてとくちるとは花を栄花にして也

清原深養父

[968] 一七条中宮とは昭宣公御女也

968 一久方のなかにおひたるさとなれはひかりをのみそたのむへらなる
事書ニみえたり久方は桂の里ニありし時也中宮をは月にたとへ申
也月を久方と云とある事此哥よりの事也

伊勢

969 一今そしるくるしき物と人またむさとをはかれすとふへかりけり
事書ニあらは也さとをはかれすの事俊貞かいとまこひにありく
もことはりなりと云心とも又我事を人のまたん所へはとく可行
事なるともあり

なりひらの朝臣

970 一わすれては夢かとそ思おもひきや雪ふみわけて君をみんとは
事書ニあらは也しゐてかのむろにまかりてとは雪をわかて切ニ忝
心也

同

971 一としをへてすみこしさとをいてゝいなはいとゝふかくさ野とやな
りなん
事書ニみえたりいとゝふか草とは野の神也

972 一野とならはうつらとなきて年はへんかりにたにやは君はこさらん
返し義なしかりにとは鶉と云付て小鷹狩の事也

よみ人しらす

973 一我を君なにはのうらにありしかはうきめをみつのあまと成にき
左の事書ニ見えたりなにはのみつの寺とよむ也

974 一なにはかたうらむへきまもおもほえすいつこをみつのあまとかは
なる
返し義なしいつこをみつのとは我をうらむへきなに事をみてか
如此はあると也

975 一今更にとふへき人もおもほえすやへむくらしてかとさせりてへ
義なしかとさせりてへとはかとさせりといへと也

みつね

976 一水のおもにおふるさ月のうき草のうき事あれやねをたへてこぬ
義なし事書ニみゆ

同

977 一身をすてゝゆきやしにけむおもふよりほかなる物は心成けり
事書にみゆ

[978] 一むねをかのおほより　宗岳大頼

同

978 一君かおもひ雪とつもらはたのまれす春より後はあらしと思へは
事書ニみえたり

979 一きみをのみおもひこしちのしら山はいつかは雪のきゆるときある返しにて心あらは也

宗岳大頼

980 一思やるこしのしら山しらねともひとよも夢にこえぬよそなき事書ニみゆ

きのつらゆき

981 一いさこゝにわかよはへなむするはらやふしみのさとのあれまくもおし

義なし伏見の里大和国也山城の二あらすゆうゑん法師は伏見の仙人と也伏見の翁ともいへり恵心の僧都の尺二今メキノ中将長井ノ侍従伏見の翁と是三人仏法にはいらすされはみたる者となん古哥二すかはらやふし見の里をみわたせはかすみのひまにみゆるをはつせとまり大和国分明也

よみ人しらす

982 一わかいほはみわの山本こひしくはとふらひきませすきたてるかと義なし三輪明神御詠と也但手継なしと也

同

983 一わかいほは宮このたつみしかそすむよをうち山と人はいふなり義なししかそ住とは然もかうすむと也鹿のしかとも一説杜子美ニムスフラスシテ夜金銀ヲシリカイセスシテ朝ヒ鹿ヲミルトアル閑居山居の躰也一説面白と也御物語二或記二宇治殿へ白河院行幸ありし時其日還御あるへきと被仰其子細明日大白かたふかり也行家朝臣陰陽師也宇治殿北也とて御腹立ありしに我庵はの哥を引て申也

984 一あれにけりあはれいくよのやとなれやすみけむ人のをとつれもせぬ

義なし

よみ人しらす

[985] 一ならへまかりける時とは遍昭の母奈良二住給ふ也

985 一わひ人のすむへきやとゝみるからになけきくはゝることのねそする

事書みえたり歎くはゝる調子を聞て愁をも知へき也第一第二ノ絃は夜鶴子ヲ思籠ノ中二鳴と云事をもひくさして不用

よしみねのむねさた

[986] 一二條　源至朝臣カムスメ也

986 一人ふるすさとをいとひてこしかともならの宮こもうきなゝりけり事書二見えたり我住所をうしとおもひていてゝこゝにとゝまれは奈良も古郷なれはうき名と云也

二条

987 一世中はいつれかさしてわかならむゆきとまるをそやとゝさたむる

よみ人しらす

988 一相坂の嵐のかせはさむけれとゆくゑしらねはわひつゝそぬる

同

989 一風のうへにありかさためぬちりの身はゆくゑもしらす成ぬへら也以上三首蟬丸哥也うたかふ二は非すはゝかりたる歟と也（＊）あふ坂の関の嵐のはけしきにしゐてそゐたる世をすくすとて此

哥ははくかの三位たちきゝしと也

【校異】＊―古今には作者をあらはさず、後撰には作者をかける也とぞ。続古今、事書ニ宿をうりてよめる**伊勢**

990 一あすかゝはふちにもあらぬわかやともせにかはりゆく物にそ有ける

事書ニみえたりせにとは例のはね字也

【校異】事書ニ宿をうりてよめる―＊

きのとものり

991 一ふるさとはみしこともあらすおのゝえのくちし所そ恋しかりける

事書ニみゆ碁也ワウシチカ事也

【校異】ワウシチカ事也―晋王質が故事也

[992] 一みちのく女也橘のくすなをかむすめ也

【校異】みちのく女也―＊

みちのく

992 一あかさりし袖のなかにやはいりにけんわかたましひのなき心ちする

事書ニみえたり

[993] 一もろこしのはう官とは唐船ニは遣唐使舟チヤウ官ノ舟シ官ノ舟判官ノ舟四艘也

ふちはらのたゝふさ

993 一なよ竹の夜なかきうへにはつ霜のおきゐて物を思ころ哉

事書にみえたり物を思とは渡唐の事思也（＊）

【校異】事書にみえたり―歌に　＊―亨竹、日本紀。

よみ人しらす

994 一風ふけはおきつしら浪立田山よはにや君かひとりこゆらん

事書ニあらは也しら浪のこと立田山いはん為也と数多尺也盗人の事さして不用給和同五年ニ山邉赤人の哥ぬす人のおきつしら波立田山いつかこえきていもにあふへきともありと也

【校異】赤人の哥ぬす人の―の御井にてと有。長田王の歌、水底の

995 一たかみそきゆふつけとりか唐衣たつたの山におりはへてなく

義なしゆふつけ鳥とは四鶏の祭あり関々ニ放（ハナサル、）さるゝ也四塞（サイ）とも四角とも関の事を云也又鶏の尾の白きをゆふに似たると也

996 一わすられん時しのへとそはまちとりゆくゑもしらぬ跡をとゝむる

あとをとゝむるとは手跡をとゝむる也さうけ（人の名也）つ鳥のあとをみて文字を作也千鳥に可限事ならす千鳥の砂ニあとのみゆると也ちとりのたち行も行ゑしらぬと也躰面白しと也

【校異】可限事ならす―限べからず。

文屋ありすゑ

997 一神な月時雨ふりをけるならのはのなにおふ宮のふることそこれ

事書にあらは也ならのはとは奈良の御事いはん為也是大同の天子平城の御事ニはあらしと也貞観の御宇まて清和天皇也五十年はかり現存の人にもあるへし若持統文武の時分歟新田高市人丸の時分事歟と也

【校異】人に―人く

大江千里

998 一あしたつのひとりをくれてなくこゑはくものうへまてきこえつか

なん

事書ニみえたり雲の上までとは日本記ニ男をくれて鳴声天ニ聞ゆとあり

ふちはらのかちをむ

999 一人しれす思心は春霞たちいてゝきみかめにもみえなん

子細同前

伊勢

1000 一山河のをとにのみきくもゝしきを身をはやなからみるよしもかな

事書にみゆもゝしきは大内也をとにきくとは伊勢ひきこみて居て大内の事をよそにきくと也身をはやなからとは昔は宮つかへしと也身をはやとは水のみおの心也山川と置は音はやくいはん為也哥の心むかし恋しきと也引哥ニかくはかりあひも思はぬもゝしきを見さらん事のなにかかなしき是恋しくての哥也

（注）　目移りによる誤写と思われる。

〔付記〕本稿をなすにあたり、資料の閲覧及び翻刻の許可を戴いた京都府立総合資料館に深謝申し上げます。

（ひだか　あいこ・本学大学院博士後期課程）